

## 19. グループホームとの連携を通じて看護師の役割の必要性について

永田たゑ子（社団法人長野県看護協会 南松本訪問看護ステーション）

要旨：当ステーションはH18年8月からⅡユニット（利用定員18名）を設置したグループホームとの契約訪問を開始した。3年半の訪問看護を通してグループホーム入居者の健康管理、退職者の状況や介護職員との関わりから、看護師の役割の必要性について振り返った内容をまとめた。

キーワード：高齢化、施設職員への指導

### A. 目的

高齢化社会になり認知症の有病率は増加の傾向にある。独居や高齢者のみの在宅生活は介護力不足で施設への入所を余儀なくされる状況が生じる。この為、認知症ケアを支えるグループホーム（以下GH）の役割は大きいが高齢の入所者が重度化し介護現場は混乱を極めているのが実態である。今回、当ステーションがGHと関わった経過について検討した。

### B. 方法

期間：H18年8月1日～H21年3月31日

H16年に開設したGHとの契約では、入所者の健康管理・医療的処置管理・主治医との連携を中心に、週1回の訪問看護と月1回の施設職員との勉強会を実施することになった。訪問看護では、入所者のバイタルサインをチェックし情報交換をしながら介護への注意事項を説明、助言を行った。職員との勉強会では施設側から提案された内容を参考に計画し実施した。

### C. 結果

訪問看護を開始した当初は、施設職員からの要望が爪切りやフットケアであった。しかし、臨時で訪問を要請されることが多く、その内容は便秘や意識レベルが低下しているなどであったが、排便状態の確認が不十分であったり、夜間不眠で朝方になって熟睡しているなどの状況であったりしていることがあった。

月1回の勉強会は、他のGH入所者の事例紹介、バイタルサインチェック方法と注意事項、便秘・尿失禁のメカニズムと排泄の重要性、意識障害の観察ポイント、高齢者の特性、認知症高齢者との関わり方、脱水予防による水分補給などについて行った。その結果今までとは違う相談内容となり、血圧の異常や便秘であるなどの相談が増加しその場で問題が対処可能となった。意識レベルの低下についても、問題点を明らかにしていくことで観察の方法・水分不足・室温や掛け物の調整などより具体的にアドバイスが可能となった。

### D. 考察

この間退所された利用者は16名で、その内容は軽快し

自宅1名、入院12名、特別養護老人ホーム入所1名、施設での看取り2名で、平均年齢85.4歳であり、高齢化は明らかである。単に認知症のケアに止まらず複数の身体的な合併症を有している利用者が殆どであり、介護ケアのみでは日常生活を送ることが出来ない状況がある。排泄の管理を例に挙げても、生活習慣・食事摂取状況・水分量・消化機能・排泄場所・便秘の対応・服薬管理など専門知識を合わせた援助が必要となっていることは否めない。現在入所中の体調の悪化でバルンカテーテル留置中・人工肛門設置をした入所者もいる。

この間の施設職員との勉強会で、異常の早期発見で受診を勧めることで対応が可能になっているが高齢化による体調の悪化に追いつかない状況があり、本来の認知症ケアが充分できないでいる。

### E. まとめ

重度化するGHの入所者の健康管理に関わる看護師の需要は益々増加し、施設職員の多様化する役割に対応した連携がこれからも重要となってくる現状を痛感する。

